富士信仰建築、御師屋敷の近世から近代における変容について
―山梨県富士吉田市を中心として―

K01048　国重清香

Ⅰ　はじめに

Ⅰ－1　研究目的

富士山麓の町である山梨県富士吉田市には「御師屋敷」と呼ばれる歴史有る屋敷の形態が残されている。かつては富士信仰のメッカとして栄え、長く歴史を刻んできたこの町も、近代化した現在の町並からではその様子を偲ぶことすらままならない。近年、富士山を世界遺産として登録しようという動きがあるが、これもゴミ問題や自衛隊演習場等の問題により巧く行っていないのが現状である。しかし我々に出来ることは山麓の美化だけではない。前述の様に富士山は「霊山」として崇められてきた歴史を持っている。そしてその歴史を顕著に表している物の一つがこの御師屋敷を始めとする建物の変容なのである。この研究では実測調査及び先行研究に基づいて、その消えつつある御師屋敷の歴史と変容を紐解き、今後富士信仰の文化的価値を訴えるにあたっての資料の一つとして、役立てて頂く事を目的としたい。

Ⅰ－2　研究方法

①御師屋敷を始めとする富士吉田市上吉田宿の近世から近代における建物の実測調査を行なう。
②既存のデータと併せ御師屋敷を中心に、上吉田宿の屋敷形態の変容を考察する。

Ⅱ　富士信仰について

本研究にあたり、富士信仰に関係する主な用語と、その歴史の解説をおこなう。

＜御師＞

富士講等の富士信仰の信者が富士山に登る際に、その宿の世話を主な生業とし、登山道具の貸付けも行なう人々を指す。宿泊業を営む立場ながら神官でもあり、富士信仰における宗教的な地位も高い。その「宿泊業者であり、宗教者である」という二面性が一般の職業と性質が大きく異なる点で、また建築や歴史、果ては町並において様々な影響を与える部分である。

＜富士信仰と御師の歴史＞

「富士信仰」は「浅間信仰」ともいい、古くは平安時代から存在する。富士山を霊山として信仰する宗教全般を指す。上吉田の富士信仰は御師達により培われた。その全盛期は江戸時代で、江戸で発生した同じ富士信仰である「富士講」と合流する形で莫大な信者を得た。しかし、その後余りの盛況ぶりから富士講が新興勢力となることを恐れた幕府が取り締まり令を出した為に、江戸の富士信仰信者は大幅に減ってしまう。この際上吉田の富士信仰は富士講と明確に分離することにより、幕府の取締りを切り抜けた。しかし富士講という莫大な信者を抱える支えを失ったことは、後の衰退に大きく影響したのであった。明治時代に入ると上吉田の富士信仰は、政府の神仏分離令と廃仏毀釈に合う。その為御師達は今迄共存していた仏教と神道の御神体のうちの半分を破棄せざるを得なくなり、その宗教性を減衰させてしまった。そしてこの為に信仰登山が減り、逆に観光登山が増え、御師の職業は、「宗教者」から「宿泊業者」へと性質を変えることとなる。また、大正時代に入ると関東大震災と第二次世界大戦で東京が荒廃し、富士信仰の拠点も多く失われた。このことで更に東京からの信仰登山は減り、更には観光等の目的で山麓を訪れたとしても、「富士スバルライン」等の交通網が発達した為に宿泊の必要がなくなってしまった。よって富士山信仰の恩恵を受けて宿泊業を運営していた御師は現在殆どが廃業に追い込まれ、御師住宅も残っていないか放置され老朽化が進行している状況である。

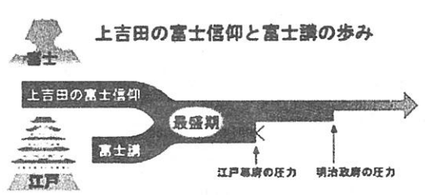


図1　上吉田の富士信仰と、富士講の歩み

Ⅲ　上吉田宿について

本研究の調査対象地域は、図2に示される上吉田宿である。上吉田宿は現在の山梨県富士吉田市の一部であり、富士山の北に位置する登山口周辺の町だ。御師達の活動の中心地である。元亀3年（1572）にこの地に移転し、慶長11年（1606）以降、「上宿」「中宿」「下宿」と三つに区域を分け、町並を形成した。

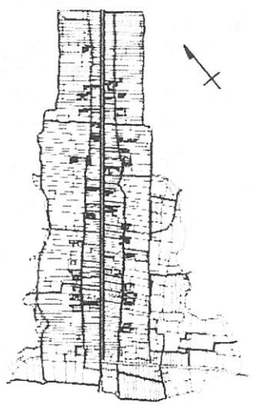


図2　調査対象地区

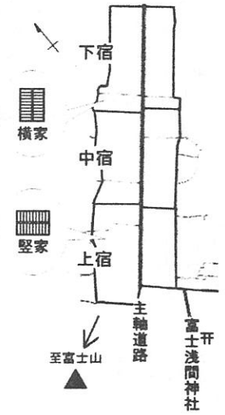


図3　上吉田宿概要

町並の傾向としては、より富士山に近い上宿に特色ある格式高い御師住宅が多く含まれ、より裾野である下宿には宿場町に似た町並が形成されている。ここでは図3に示すような、主軸道路に棟筋が垂直に交わる「竪家」が格式高い。その為竪家は上宿に多く、逆に棟筋が道路と平行になっている「横家」は宿場町的なので下宿に多く分布している。また図4に示すように、時代が進む程町並全体が竪家から横家に変わっていく傾向も有る。これは時代とともに御師の性質が「宗教者」から「宿泊業者」寄りに流れていったことが起因している。また敷地の面では、主軸道路に対して奥まっている「奥屋敷」が、道路に面した「前屋敷」よりも格式が高いとされている。

本研究では、この対象地区にある御師住宅から間取りの変遷、及びその理由が読み取れるものを数件取り上げて検証し、更に外川家と刑部旅館に関しては夏に行なった実測調査を元に考察をした。

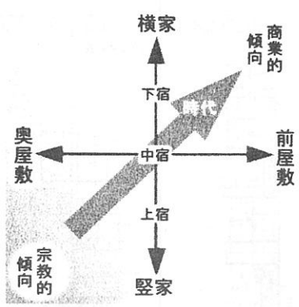


図4　御師屋敷の変遷とその傾向

Ⅳ　御師屋敷の建築

図5及び図6の二つの御師屋敷を例に挙げ、御師屋敷の特徴と変容を説明する。

Ⅳ－1　御師屋敷の典型

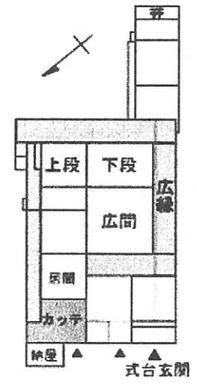


図5　槇田家平面図（古図）

最も宗教的な要素の強い御師屋敷の例として、元亀3年（1572）に建設された槇田家を取り上げようと思う。その特徴は以下の通りである。

①堅家で妻入りである。②建物の南寄りに「式台玄関」と呼ばれる、宗教行事用の特別に格式高い玄関がある（その他に普段用の玄関であるナカノクチと家人専用のカッテグチがある）。③広間、上段の間、下段の間を鍵座敷形式に配置している（図5参照）。④南側に広い廊下がある⑤式台玄関から見て正面奥に神殿がある。⑥北側に台所、納屋が有り、部屋が道路側に突出している。

これ等の特徴を多く持つほど格式高い御師屋敷なのであるが、近代に入ると次ページの表1の通り、御師職の変容に伴って屋敷も変容する。

Ⅳ－2　御師屋敷の変容

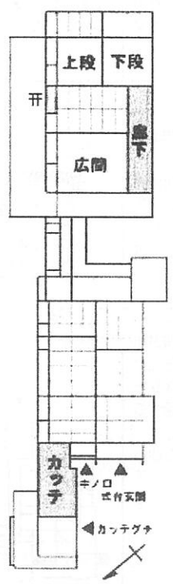


図6　外川家現状平面図

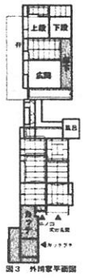
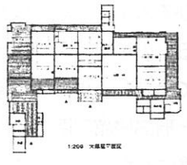
図6は明和5年（1768）に建設された「外川家」という御師屋敷の、現状平面図である。この外川家は建設年代こそ古いのだが、明治初期に離れを増築し、その際の変容が御師屋敷全体の変容を顕著に表しているために取り上げた。

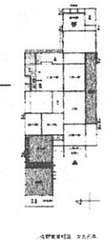
先述の条件をあてはめて行くと①②④⑥は満たしているが、鍵座敷形式になっておらず、神殿は式台玄関の正面には無い。これは御師職の内容の変化によると推察できる。

図7　外川家外観

指導教員　伊藤　洋子　教授

表１　御師職の変容と御師屋敷の変容の関係

年代		富士信仰と御師の変遷	横田家	外川家（しほ屋）	田辺太郎家（大幣司屋）	田辺四郎家（大国屋）
室町			元亀３年（1572）頃に屋敷が建つ。御師屋敷の特徴をほぼ全て持つ。			
江戸	前期	＜富士信仰の合併＞ 上吉田の富士信仰と、江戸の富士信仰である「富士講」が合流、御師屋敷の宿泊客が増える。				
	中期	＜富士講の繁栄＞ 享保18年（1733）、富士山にて食行弥勒(じきぎようみろく)が即身仏になり、庶民の間では更に富士講熱が上がる。これを受けて村上光清による浅間神社の大改修が行なわれ、江戸でも「江戸八百八講」と言われる程に講舎が増える。		富士講の全盛期である明和５年（1768）年に屋敷が建つ。竪家の妻入りであり御師屋敷としての特徴を持つが、間取りは前座敷形式であり、宗教的要素はやや薄い。	富士講の全盛期である、18世紀後期頃に屋敷が建つ。竪家の妻入りだが、間取りは田の字型であり宗教的要素はやや薄い。	富士講の全盛期である18世紀末頃に屋敷が建つ（中期～後記）。敷地は格式高いとされる奥屋敷だが、形状は宿場風である横家平入りである。鰹座敷形式を持つ。
	後期	＜富士講との分離＞ 寛政７年（1795）に、江戸幕府の手により、「富士講取締りの触書き」が出される。これは富士信仰の全てではなく「富士講」のみを取り締まったものだったが、寛政９年（1797）の触書で民衆の間に混乱が起こり、御師衆は上吉田の富士信仰と「富士講」の分離をすることにする。 その後御師は幕府に公認されて活動するも、客足の多くを失う。		 19 世紀初頭から幕末にかけての間に式台玄関を増築か。		享和２（1802）年に、富士講取り締まりによる混乱を受け、家主の田辺和泉が祈祷檀家への配札活動が許可されているということの確認を政府に求める。
明治		＜神仏分離と御師職の衰退＞ 明治元年（1868）に神仏分離令、その後に廃仏毀釈が実行される。これにより宗教的伝統の約半分を破壊され、御師の権力は低下する。更に今迄の御師の利権が国家に帰属するようになった為に、公的にも御師は一般農民と同じ扱いになる。 その後も交通網の発達に伴い信仰登山者は減ったが、観光登山者が増えたので客足は増加した。	明治末から大正 10 年迄、郡内繊物株式会社の事務所があったので世話人へ織物を送ることにより講員を集めていた。また、この頃檀家の出資によって座敷を神殿の前に増築した。	初期に観光登山客向けの離れを、檀家の出資によって建築する。また、神殿の位置を伝統的である玄関の正面から、宗教的には格式がそれほど高くない位置に移動する。これによって宗教色は大きく薄れた。		
大正		＜戦争と富士信仰の衰退＞ 大正１２年（1923）の関東大震災で関東にある富士信仰の拠点が壊れ、関東からの客足が減る。 大正２９年（1940）勃発の第二次世界大戦前は、富士山に登ってから出兵する人が増え、やや客足が増える。しかし大戦後は東京が荒廃したのでまた客足が減る。廃業する御師が増える。				戦後に御師しめや（小沢家）が廃業したので、檀家を引き受ける。
昭和以降		＜交通の発達と上吉田宿の衰退＞ 昭和８年（1933）の頃には交通網が発達し、「食えぬ御山」と言われるほど上吉田に立ち寄る客が減少した。昭和３９年（1967）に富士スバルラインが開通すると、その傾向は一層顕著になった。 その後御師は現在迄減少の一途を辿っている。	昭和５０年に御師を廃業する。 	昭和３７年に御師を廃業する。 	昭和４０年以前に御師を廃業する。 	現在も宿泊業を継続している。 

佐藤家（毘沙門屋）	小佐野家（堀端屋）	藤井家	刑部旅館
富士講の全盛期である１８世紀末頃に屋敷が建つ（中期～後期）。御師屋敷の特徴をほぼ全て持つ。			
	文久元年（1861）頃に屋敷が建つ（末期）。竪家の妻入りで、御師屋敷の特徴をほぼ全て含む。これは富士講取締りを受けての、客足低下に対する計画と推測される。  明治２５年（1893）に、住居として使うために風呂とトイレを改築する。	１９世紀中期頃に屋敷が建つ。横家の平入り。御師屋敷の並ぶ場所に建つが、御師屋敷ではない。敷地も道路沿いの前屋敷である。	
			観光登山の増加に伴い、初期に建つ。横家の平入りで、二階建てである。敷地も前屋敷であり、宗教的要素は薄い。
この時代に増築か。			
昭和２５年に御師を廃業する。 	御師屋敷の特徴を多く残しているため、現在は国指定重要文化財とされている。 		昭和５０年代に御師を廃業するが、現在でも火祭りの際に数人の宿泊客が来訪している。

まず注目すべきは、上段の間と下段の間が神殿よりも奥に配置されている点だ。この二部屋は図８の釘隠し等に祈祷檀家を示す印が見られる。その部屋を御神体よりも格式高い位置に置くということは、以前の御師屋敷では有りえない構造である。また神殿と式台玄関という宗教色の強いもの同士が直線で結ばれなくなったことも宗教色の薄れを顕著に表していると言えるだろう。この離れが建築されたのは丁度「神仏分離令」と「廃仏毀釈」が実行され御師の権力が弱まっていたころである。また、図９に外川家の建設当初である明和５年（1768）の復原平面も併せて示す。

図８　檀家を示す釘隠し

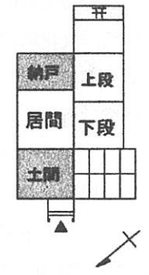


図９　外川家復原平面図

以上の二つの他にも、御師職の変容に伴った屋敷の変容は確認することが出来る。表１に上吉田宿の御師屋敷の中で建築年代の判明している建物の変遷と、御師職の変遷の関係を纏めた。これを見ても解る様に、御師の宗教性が弱まるにつれて御師屋敷も図２に示したような、建築的変容をしていることは明らかである。

Ⅴ　まとめ

以上のことから御師職の宗教性が失われるにつれ、御師屋敷に以下の傾向が見られることが確認できた。

①上宿から下宿へ建設地が移る傾向

②竪家から横家へ変容する傾向

③奥屋敷から前屋敷へ変容する傾向

④宗教的、あるいは伝統的な間取りよりも、宿泊業を優先した間取りにする傾向

そして、このことから「御師の辿った歴史に従い、御師屋敷もまた変容してきた」と言う事が出来るだろう。このように上吉田宿の文化を示す際に「御師屋敷」と「御師」、そして「富士信仰」は非常に重要なものである。

＜参考文献＞上吉田の民俗（富士吉田市・1999）
富士吉田市史/通史編/第２巻／第３巻（富士吉田市・2003）
富士吉田市史/民俗編/第１巻／第２巻（富士吉田市・1996）
山梨県の民家（山梨県教育委員会・1982）　他